

# やっぴいん生きている 江戸・東京野菜

—大竹道茂さんのそれを読んで—

秋田義信

前号（二〇四号）。私は、かねがね東京都農協中央会の太竹さんの企画力・実行力（その底にある情熱）に敬意を表してきた一人である。たとえば、平成14年刊行の「都市農業に息づく心」や、今回のこれを読み、更にたまたげた。私の以前からの悪いクセが今も治らず、つい他人を槍玉に挙げてしまう。それは何か、どういう人たちをかとなれば、（死ぬまで忘れまいと思っているのだが）昭和五十年代後半から、多くのメディアが流行のようにとりあげた「都市農業を潰せ！」である。

先陣を切ったのは、某社の会長I氏（勲一等生存者叙勲受章）の論調だ。「農・工の単位面積当たりの生産性に比べれば、工業のそれ

は一五〇〇倍である。国内で農業をやらせておくことは国家の一大損失だ」。〔昭和五十七年七月・朝日新聞〕

次は評論家のO氏。「大都市近郊百キロ圏内の農業をやめさせれば、住宅用地の値段が五分の一くらいになる。（中略）十年後には大都市百キロ圏内に農地が皆無という青写真を描いていく必要がある」。〔昭和六十年八月・文芸春秋〕

ほぼ同様の主張が評論家のT氏で「都会の農地を宅地にすれば、日本人は三倍の広い家に住める」。〔昭和六十一年八月・週刊ポスト〕こ



の人、翌年、祥伝社から「日本農業大改造論」を出した。その中で「農地課税（固定資産税）や相続税が低いから農地を手放さないのだ。宅地化が進まないのだ」。驚くことに、現職の農業経済学者（関西のある国立大・N教授）まで異口同音の主張。「都市農業を安楽死させる。宅地・住宅難解消のために。農地課税を高くしろ」。

同じころ、NHKのテレビ討論で「農地は農家のためにのみにあるのではない。大都市圏でも震災のときなど避難地にもなるし、水害の予防にもなる」と言った人に対し、前述の某評論家が「東京の水害？ チャンチャラおかしいよ」と嗤った。

（今年十九年の台風のとき、東京都内の杉並区だったか、大雨で道路の側溝の水が溢れて住民が避難した。この発言者は、こういう現象をみて何を思ったことであろう）

佐賀県唐津市の農業・作家、山下惣一さんは平成六年十一月、朝日新聞に「言った人は

忘れても言われた側は忘れない」と書いた。近年、都市近郊でも農村地帯でも、農地が加速度的に潰れて、耕作放棄地の増加に農水省も慌てるようになった。食料自給率の低下、地球温暖化問題、食料輸出国農民の作目転換で小麦・大豆などの価格高騰傾向は周知の通り。輸入野菜の安全度も、地方小都市の住民まで日常の話題にする。

都市農業、近郊農業の存在は鳥にたとえらる。大竹さんの今回の「江戸・東京野菜」にも出てくるように「食農教育」の生きた教材である。小学校生徒たちへの「尊農」「尊食」の植えつけは、まずこういうことから始めるべきだと思う。前述の都市農業バッテリーや都市周辺農地への課税強化、そして「宅地並課税」を政府が目論んだころ、反対運動の陣頭に立ったのが東京都農協中央会の加藤源蔵会長であり、その参謀役が大竹道茂さんだった。

（一九・一一・八日記）